

血と塹壕

—— エルンスト・ユンガー『内的体験としての戦闘』における主体について ——

大 泉 大

I

『内的体験としての戦闘 Der Kampf als inneres Erlebnis』⁽¹⁾ は1922年、『鋼鉄の嵐のなかで In Stahlgewittern』に続くエルンスト・ユンガーの二作目として出版された。『鋼鉄の嵐のなかで』は、第一次世界大戦での戦場体験を、一人称による日記体を主な手法にして「即物的に記述」⁽²⁾した作品であった。『内的体験としての戦闘』は、ユンガー自身の言葉によるならば、第一次世界大戦に対して問いを立て、この問いをめぐる纏められたエッセイである。このエッセイの冒頭、「導入」と題された章で、取り組む問題について次のように述べられている：「我々は戦争にとってなんだったのか？ 戦争は我々にとってなんだったのか？」、「この問いに本書もまた取り組む」(S.13.)。だが、この問いに対する答えも「導入」においてすでに与えられている。問いを提起する前に、ユンガーは戦争についてヘラクレイトスの言葉の残響のうちに書く：「あらゆる事物の父である戦争は、我々の父でもある」(S.11.)。戦争こそが、「人間とその時代を、現に存在するものにした」(S.11.)。しかしまた、戦争はただ父であるだけではない。戦争は「我々の息子でもある」(S.12.)。あの物量戦は、「物質に酔わされた時代の息子」である「我々」によってなされた、と言う(S.12.)。

「我々は戦争を産み出し、戦争は我々を産み出した」(S.12.)という入れ子構造は、答えを先取りしている。つまり、戦争と我々とは、同時に父であり子である。そしてこの答えは、エッセイの結部において戦争のうちに「肯定を、より高度の運動を」感じる「内的体験」⁽³⁾という概念によって裏打ちされ、入れ子構造において現われた「根源的なもの、暴力的なもの」は、「つねに存在したし、たとえ人間と戦争がもはやなくなろうとも、つねに存在するであろう」と承認され

(1) テキストは、全集 (*Sämtliche Werke*. 18 Bde. u. 4 Supplementbände. Stuttgart 1978ff.) 第7巻所収を使い、引用に際しては本文中にページ数のみを示す。

(2) Ernst Jünger: In Stahlgewittern. Vorwort (1919). In: Politische Publizistik 1919 bis 1933. Hrsg., kommentiert und mit einem Nachwort versehen von Sven Olaf Berggötz. Stuttgart 2001. S.11.

(3) 「内的体験」は、「戦争の心理的諸影響の伝達」と「出来事の形而上学的裏付け」とを試みるための概念である。Steffen Martus: Ernst Jünger. Stuttgart/Weimar 2001. S.41.参照。

る(S.103.)。このテキスト全体は、戦争によって産み出されると同時に戦争を産み出した「新たな人種」(S.37.)の存在を確認する保守革命的イデオロギーの言説に挟まれており⁽⁴⁾、その間で、すでに与えられている答えを肯定するに至る解釈のプロセスと体系を、時に抽象的に、時に体験に即して呈示する。だから、テーヴェライトが指摘する「男性的主体の確立」や、ミュラーが論じた「生の英雄化」といった生の形而上学的意味付けを、「戦争体験という諸条件下での「近代的自我」のポートレート」⁽⁵⁾であるテキストから主題として読み解くのは根拠のないことではない⁽⁶⁾。また「導入」では、戦争と自分たちとの関係によってもたらされた結果が、「我々は潜水夫のように体験へ身を投じ、変化して帰ってきた」(S.13.)と述べられている。この変化は、ユンガーが試みた戦争解釈を問題にするなら、すでに各論者によって指摘されているようなイデオロギーに含まれ、そしてイデオロギーを肯定する体系へと統合されるだけの変化であろう。だが少なくとも、変化を叙述するプロセスにおいては、そうではない。テキストの両端で示されている変化についてのイデオロギー的言明は、ユンガーによる解釈であり、「権力への意志は解釈する」⁽⁷⁾という意味で、「権力への意志としての戦闘への意志」⁽⁸⁾である。ここでの解釈は、「内的体験」というパースペクティブのもとに対象を眺め位置付けることを意味する。だがこのテキストには、著者の意図とは無関係に、「体験へ身を投じた」者の変化が体系に統合されない姿でも記録されている。

この観点から『内的体験としての戦闘』は、変化を価値付ける戦争解釈の体系と共に、第一次世界大戦の主要な舞台となった塹壕内での自我/私とその表象、そこでの主体の変化を叙述している。ボーラーは、ユンガーの「戦争作品において、「ドキュメント」と関わらねばならないと

(4) テキストの冒頭は、「時折、精神の地平を新たな星晨が照らす」と始まる。S.11. 参照。また保守革命派とは、市民社会への反発という点ではその他の保守勢力と思想を共有するが、市民社会的な価値を再構成することを目指した後者と違い、あらゆる市民社会的な秩序、価値を破壊し、その上で人間存在の転換を実現する革命を標榜していたグループである。新たな人間存在のモデルはニーチェの作品、そして第一次世界大戦での兵士の姿に求められた。詳しくは Armin Mohler: Die konservative Revolution in Deutschland 1918-1932. Darmstadt 1989. 参照。

(5) Martin Meyer: Ernst Jünger. München 1990. S.43.

(6) Klaus Theweleit: Männerphantasien1+2. (Bd.1. Frauen, Fluten, Körper, Geschichte.; Bd.2. Männer Körper. Zur Psychoanalyse des weißen Terrors.) München 2000. Bd.2.S.195-248. 及び Hans-Harald Müller: „Im Grunde erlebt jeder seinen eigenen Krieg“. Zur Bedeutung des Kriegserlebnisses im Frühwerk Ernst Jüngers. In: Müller, Hans-Harald/Segeberg, Harro (Hrsg.): Ernst Jünger im 20.Jahrhundert. München 1995. S.24-29. 参照。

(7) Friedrich Nietzsche: Der Wille zur Macht. Versuch einer Umwertung aller Werte. Ausgew. u. geordnet von Peter Gast unter Mitwirkung von Elisabeth Förster-Nietzsche. 13., durchges. Auflage mit einem Nachwort von Walter Gebhard. Stuttgart 1996. S.433.

(8) Jünger: Das Wäldchen 125. Eine Chronik aus den Grabenkämpfen 1918. 2.Aufl. Berlin 1926. S.191.

誤って想定されるかもしれない。むしろ、これらの作品は高度の文学的様式化とある種のあらかじめ刻まれた思想上の図式を認識させる⁽⁹⁾と指摘しているが、主体の変化を読み取るためには、もっぱら「ドキュメント」と関わらねばならない。

それでは、具体的に変化とはいかなるものか。またこの変化は、どの程度まで第一次世界大戦、それも特に塹壕と関係があるのか。そして、体系とはなにか、体系に統合されない主体のあり方とはいかなるものか。本論は、これらの問いに取り組む。

II

『内的体験としての戦闘』は、14の章で構成されている。すなわち、「導入」、「血」、「戦慄」、「塹壕」、「エロス」、「平和主義」、「勇氣」、「傭兵」、「対照」、「火」、「混乱」、「不安」、「敵について」、「戦闘の前」である。「万華鏡のような」⁽¹⁰⁾章立てとも見えるが、メルゲントラーが指摘するとおり語りのレベルでは二つに分けられる⁽¹¹⁾。「対照」は、休暇中の兵士が前線を離れ街で過ごす様子を前線での日常と休暇中の日常を交えて描くことで、両者の差異と、兵士の特異な状態を際立たせる章であるが、「対照」はただ叙述の内容に関わる標語ではない。「対照」は、「超越論的に-叙述法の交代をも印づける」⁽¹²⁾。語りは、「対照」以前の章では戦場から時間的にも空間的にも距離を置いた位置で、「レトロスペクティブに」⁽¹³⁾なされているが、以後の章では「戦争の「中心」から高度の信憑性をもって」⁽¹⁴⁾、時間的にも空間的にも戦場の只中でなされる。メルゲントラーは、語りの位置変更を、戦争体験を語ることの信憑性(Authentizität)を高めるために必要な変更と論じている。しかしまた、この変更は作品の内容、さらに戦場での出来事を表象する主体との関わりにおいても重要である。まずレトロスペクティブな叙述で体系が構築され、「中心」での叙述はこの体系で解釈されるからだ。したがって、叙述法の交代は、戦場体験のみならず体系の信憑性を高めるためにも必要といえる。

便宜的に叙述法変更以前の諸章を前半部、以後の諸章を後半部と呼ぶことにし、まず、前半部における主体についての叙述を見ていく。「血」においては、戦争であらわになった根源的なものについて述べられる。この点で、この章はテキストの基調をなしている。

(9) Karl Heinz Bohrer: Die Ästhetik des Schreckens. Die pessimistische Romantik und Ernst Jüngers Frühwerk. München/Wien 1978. S.109f.

(10) Martus, S.41.

(11) Volker Mergenthaler: »Versuch, ein Dekameron des Unterstandes zu schreiben« Zum Problem narrativer Kriegsbegegnung in den frühen Prosatexten Ernst Jüngers. Heidelberg 2001.S.93-103.参照。

(12) Ebd., S.100.

(13) Ebd., S.97.

(14) Ebd., S.103.

確かに、増大する洗練化は個人を純化し高貴にしたが、それでも依然として動物的なものが彼の存在の根底に眠っている。磨かれヤスリをかけられた、静かな文明の快適な織られた絨毯の上で眠りながら、習慣と気に入った形式に隠されて、依然として動物は個人のうちにたくさん存在する。しかしながら、生の描く波の線が原始的なものの赤い境界線へと揺れ戻る時、仮装が落ちる。かつてのように裸で、彼、原始人、洞窟の住人が、その解き放たれた衝動の完全な無制御において、突然現われる。[……] 自身の石化した巢、都市の機械的行動のうちでは冷静に、そして規則的に血管を貫流していた血が泡立ち、長年冷たく、そして硬直して、隠された深みにやすらっていた原生石が、溶解して再び白い灼熱になる。(S.15.)

太古への「反動」が戦争で生じ、「根源的な暴力」の「生き生きとした権力を開示する」(S.15.)。文明化された人間の仮装を破り現われた「動物的なもの」、「原始人」、「根源的な暴力」の基底に存するのが、〈血〉である。「敵へと突進し、敵を捕らえる」のは、「血がそれを要求するように」なされ、敵との遭遇は、「血の肉欲(Wollust)」の対象である(S.17.)。

「戦闘への意志」(S.41.)としての〈血〉は、戦闘をなす主体としての人間を否認する。1920年代の言説において、ベンやH・ブロッホにもみられる「太古への反動」というモチーフは、支配的文化規範への批判の役割を果たしていたとボーラーは指摘しているが⁽¹⁵⁾、このテキストでの反動はなによりもまず支配的主体概念を否定する〈血〉を志向している。〈血〉は、個人はもちろん、人間と動物と有機体を区別しない、生そのものに共通する根源的なものと把握されている。すなわち、ここでユンガーが書き留めている主体の変化は、「頭脳」から〈血〉への変化であり、個人の非個人化、人間の非人間化である。〈血〉という根源的なものの概念が、戦争解釈の体系を支えることになる。

しかし、確認しておかなければならないのは、〈血〉の再来は、たしかに戦闘における出来事と述べられているけれども、第一次世界大戦に特有の出来事とは述べられていないことである。生のうちで〈血〉は回帰する。だから、物量戦の本質をなす「技術が、殲滅を最高の芸術へと高めようとも」、〈血〉の回帰にとって「外面的形式はなんの役割も果たさない」のである(S.16.)。それどころかむしろ、「頭脳が幾世紀にもわたってますます鋭い形式へと形作ったものすべては、拳の衝撃を、測りしえぬものへ高めることにのみ役立った」(S.13.)と、技術は〈血〉という根源的なものの発露にひたすら有益であったと評価される。技術への肯定的な態度、技術に対する〈血〉の優位を疑わない態度は、〈血〉をめぐる叙述に特徴的である。そしてまた、〈血〉の主体的役割が疑われることもない。それまでの主体は非主体化されたが、主体という概念は保存されたままであり、〈血〉は主体としてあらゆる生の根底にある。

(15) Bohrer, S.76-101. 参照。

「エロス」、「平和主義」、「勇氣」の各章では、「血」で述べられた根源的なものが遍在するものであり、「生」にとって本質的であることが繰り返し強調され、戦争によってあらわとなった「新たな人種」が〈血〉という根源的なものを体現したと、あるいは〈血〉という根源的なものが「新たな人種」を産み出したと称揚される。〈血〉が人間の意志を超えた「戦闘への意志」として生を統べているのだから、当然、戦争は人間が原因となる出来事ではない。「戦争は、性衝動同様に人間の装置ではない。つまり、戦争は自然法則である。したがって、我々は決して戦争の呪縛を逃れることはないだろう。我々は戦争を拒絶してはならない。さもなければ、戦争は我々を飲み込んでしまうだろう」(S.40.)。そして、技術は「血の肉欲」の対象であり、同時に充足の媒体である。「しかし、自身が快楽に満ちて、マシンガンの後ろに伏せるとき、前方の群れはもはや蚊の踊り以上のものではない」(S.48.)。この語調は、「勇氣」の章において絶頂に達し、いわゆる決断主義⁽¹⁶⁾の好例となる。「戦闘は、殲滅であるだけでなく、生殖の男性的形式でもある。そうして、誤謬のために戦う者も決して無駄に戦うのではない」(S.50.)。「何のために戦うかではなく、いかに戦うかが本質的である」(S.74.)という言葉は、まさに決断主義の公式通りである。

ユンガーが、前半部の叙述で〈血〉という根源的なものを中心にした体系を構築しようと試みていたことは疑いない。この体系はなによりもまず、「あらゆる価値を枯葉のように吹き飛ばす」(S.48.)戦場で「内的体験」がいかに自分たちを変化させたかを解釈し意味付けるための体系であるが、そこで発現した〈血〉の意義はそれだけに留まらない。「ある文化あるいはその生き生きとした担い手、民族を常に生長する球体として観察すると、そこには意志がある。保ち増やそうとの、無際限で向こう見ずな意志、すなわち、文化の構造を確固にする磁力の中心である戦闘への意志がある」(S.41.)とするユンガーは、戦闘への意志としての〈血〉を文化の根源にも認識する。そして、このような〈血〉を体現する兵士たちが目標を目指して発する叫びは、「それまでの全てのものより美しく、陶酔を誘うように響く権力の崇高な言語 (die erhabene Sprache der Macht)」(S.50.)なのであり、こうして〈血〉の再来は価値転換を意味する⁽¹⁷⁾。けれども、この体系はある思想の圏内を抜け出るものではない。

ハイデガーは『内的体験としての戦闘』にふれて、次のように書いている：ユンガーは、「権力への意志の諸現象として物量戦の火と血、死と労働、沈黙と轟きに襲われた」⁽¹⁸⁾、つまり、戦

(16) クリスティヤン・グラフ・フォン・クロコウ『決断—ユンガー、シュミット、ハイデガー』高田珠樹訳、柏書房、1999。S.14f.参照。

(17) 「精神の洗練、頭脳の優美な祭式は野蛮のガチャガチャ音を立てる再生のうちで没落する。人は別の神々を昼の王座へのぼらせる。すなわち、力、拳、男性的勇氣である。」S.35。

(18) Martin Heidegger: Zu Ernst Junger. Gesamtaufgabe. Bd.90. Herausgegeben von Peter Trawny. Frankfurt a.M. 2004. S.218.

争を「ニーチェの形而上学の真理領域において経験」⁽¹⁹⁾した。ニーチェの形而上学とは、すなわち、「主体性の形而上学」を意味する。ハイデガーはニーチェの形而上学について『ニーチェのツァラトゥストラとは誰か?』で次のように語っている：「存在者の根源存在(Ursein)を権力への意志として認識する」⁽²⁰⁾ ニーチェは、近代形而上学と「同じもの」を思惟している⁽²¹⁾。「超感性的なものと感性的なものとの間のプラトンの位階秩序が逆転され、感性的なものが、より本質的に、さらにニーチェがディオニュソスと名付けた意味において経験されたときも、形而上学は存続する」のであり、「ニーチェの思想は、おそらく形而上学の完成を果たした」⁽²²⁾。ニーチェの思想が形而上学の圏内にあり、ユンガーはその「唯一真の後継者」⁽²³⁾であるとの指摘が、『内的体験としての戦闘』における主体およびその表象を考える際に重要であるのは、近代形而上学が主体性の形而上学であると、ハイデガーが考えているからだ。

ハイデガーは『世界像の時代』で、「ニーチェも共に含む近代形而上学総体」⁽²⁴⁾の本質をなす基体(Subjectum)という概念について論じている。Subjectumとは、ギリシア語のヒュポケイメノン(ὕποκειμενον)のラテン語訳である。ヒュポケイメノンは、「根底としてすべてを自己の上へ集める、前に一あるもの(das Vor-Liegende)」を意味し、自我とはまったく関連を持たなかった⁽²⁵⁾。だが、「人間が主体となることで、人間一般の本質が変わること」が、近代形而上学において「決定的」である⁽²⁶⁾。つまり、「人間が第一の、そして本来の基体になるならば、それはすなわち次のことを意味する：人間が、全存在者をその存在と真理のあり様において基礎づけることの存在者になることである。人間は、存在者そのものの関連の中心となる」⁽²⁷⁾。このことは当然、人間と存在者との関係を更新し、表象する人間と表象対象としての存在者という関係が生じる。その結果現われた時代を、ハイデガーは「世界像の時代」と呼ぶ。「世界が像(Bild)となることは、人間が存在者のうちで基体となることと同じ過程である」⁽²⁸⁾。人間が基体となり、世界が像として把握されると、存在者は人間の表象を通して存在するものとなる。「前に一立てる(Vor-stellen)はここで、現にあるものを対峙するものとして自分の前へもたらし、自分、表象する者(der Vorstellende)へと関連づけ、基準を与える領域としての自分へのこの関連のうちへ

(19) Ebd., S.217.

(20) Heidegger: Wer ist Nietzsches Zarathustra? In: Vorträge und Aufsätze. Stuttgart 1954. S.110.

(21) 近代形而上学における「意志」については、Ebd., S.109f.参照。

(22) Ebd., S.118.

(23) Heidegger: Zu Ernst Jünger. S.227.

(24) Heidegger: Die Zeit des Weltbildes. In: Holzweg. 7.Aufl. Frankfurt.a.M. 1994. S.87.

(25) Ebd., S.88.

(26) Ebd., S.88.

(27) Ebd., S.88.

(28) Ebd., S.92.

強いて戻す、ということの意味することになる」⁽²⁹⁾。近代形而上学の本質は、基体としての主体による表象が存在者を自分へと関連づけることにある。すなわち、主-客の関係は、主-従の関係にある。

こうして、ユンガーが展開した〈血〉を中心とする、存在者の存在を権力への意志／戦闘への意志として認識する体系が、近代形而上学の圏内にあることも確認される。この体系においては、基体としての〈血〉から全存在者が表象される。この体系を構築しえたからこそ、ユンガーは、戦争は過ぎ去ったがわれわれのうちで生き続け、「それゆえ我々は、最も創造的な意味で観照する者となら変わるところなく世界を形成する」と述べているのだ(S.12.)。〈血〉の回帰による「新たな人種」の誕生が、第一次世界大戦における決定的な変化であるとする解釈は、『内的体験としての戦闘』と発言のコンテクストは異なるが、1932年に出版された『労働者 Der Arbeiter』においても繰り返されている⁽³⁰⁾。この体系は、ユンガーが保守革命的党派に関与していた20年代の言説の出発点とみなしうる認識であり、数多く書かれた政治的なエッセイを支える土台の役割を果たしていたといえる⁽³¹⁾。

しかし『内的体験としての戦闘』は、このような体系を呈示するだけのテキストではない。後半部の叙述は、一人称、現在形を用いた戦場からの語りで展開され、〈血〉の体系を基底に解釈する叙述である。そこで「私」が語る個々の体験は、ユンガーによる解釈を通して、イデオロギー的言説へと統合されていく⁽³²⁾。この叙述の流れからユンガーの意図を忖度するなら、後半部において「中心」での体験を再現するのは、体系の「信憑性」を高めるためである。だが「私」の語りには、その「関連のうちに強いて戻す」ことのできない叙述も現われる。このような叙述を産み出すのは、〈血〉ではなく、第一次世界大戦の特徴であった塹壕というメカニズムである。

(29) Ebd., S.91.

(30) Jünger: Der Arbeiter. Herrschaft und Gestalt. Stuttgart 1982. 13f., 111f. 参照。『労働者』においては、「新たな人種」に焦点があわされる。ユンガーは、第一次世界大戦での兵士をひとつのモデルとして、労働者の形象を考究している。

(31) 20年代の政治的エッセイについては、Jünger: Politische Publizistik 1919 bis 1933. およびベルクゲッツによる後記、また川合全弘「エルンスト・ユンガーのナショナリズム論について(一)、(二)」『産大法学』第25巻第3号、184-198頁、第26巻第3・4号、61-81頁、参照。

(32) 例えば、「この戦争は終わりではなく、むしろ暴力の幕開けであり、世界を新たな輪郭、新たな共同体へと打ち砕く鍛冶屋である。新たな形式は血で満たされることを欲し、力は固い拳でつかまれることを欲する」(S.73.)。「あらゆる思考と行為を超えて、最も重い義務、最高度の荣誉、仄かに光を発する目標がある。すなわち、国土(das Land)とその偉大さのための死」(S.98.)。「確信のための死は最高の成就である。それは、信仰告白、行為、実現、信仰、愛、希望、そして目標である。それはこの不完全な世界における完全なものであり、完成そのものである」(S.100.)。他にも S.70., S.89f., S.97., S.101f. 参照。

III

塹壕について把握するためには、前半部「塹壕」と題された章の叙述を読み解くことが必要となる。なぜなら、戦闘の主要な舞台を描く「塹壕」では、前半部の他の章とは異なった論調も認められるからである。それは塹壕が、原始人／動物が体験することのない物量戦であった第一次世界大戦を特徴付けるメカニズムであることと関係がある。後半部における「中心」での語りか塹壕からの表象をも対象としているだけに、前半部での「塹壕」と他の章とのずれは重要である。

「塹壕」でまず述べられるのは、塹壕がひとつの特殊なメカニズムであることである。「そして、毎日新たな重みをもって、塹壕はその身を屈めた住人たちへのしかかる。塹壕は、自らの鈍重な歯車装置を維持するために、貪欲に血と平静、そして男性的力を自己のうちへ包み込んだ」(S.28.)。自己保存を目的とし人間をもエネルギーとするメカニズムである塹壕で、兵士は〈血〉に統べられた存在とは別の特殊なあり方を強いられることになる。「開かれた野戦のすばやい時間より悪いのは、幾週、幾月がしだいに消え去った間の、この永遠の待機状態、待ち伏せて—あること (Auf-der-Lauer-Liegen)、全感覚の緊張、殺人的遭遇の期待であった」(S.28.)。「待ち伏せて—あること」という兵士のあり方は、前半部で一貫して強調されていた主体の一方的に能動的なあり方とは異なる。第一次世界大戦において初めて全面展開された塹壕戦が、主体のこの半能動的、半受動的な強いられる緊張状態を「産み出した」のだ。それでも、ユンガーは塹壕内の〈血〉の発露を指摘する。塹壕内ではたとえ睡眠中であっても、なにか物音がすれば、兵士は武器へと無意識に手を伸ばす。この動きは、「血のうちにあるなにかであり、原始的人間の表出」である(S.29.)。

だが、「血の肉欲」に比してささやかなこの〈血〉の表出をも、塹壕は飲み込む。「抒情的感覚のための、個々の偉大さへの畏敬のためのいかなる空間も、塹壕は持たなかった」と書いて、ユンガーは、自身が強調した塹壕内の〈血〉の表出の塹壕に対する無意味を認めている(S.30.)。そして砲撃戦の日々とともに、塹壕は真の姿を現す。死者は埋葬されることなく、「完全に大地と、自分たちがそのために戦った塹壕と一体化」し、生者は「世界と体験されたものの現実性を把握しえず」、「白い包帯を巻いた青白い姿」で潜み続ける(S.34.)。「塹壕の永遠のうちで」、兵士たちは「機械のように再び鋤を手に取り、歩哨につき、あるいは不確定なものへと忍び込む」(S.32.)。こうして、「塹壕はその真の顔を示す。おぞましいものの隠蔽を好む人間が塹壕を飾り装った全てが剥がれ落ちる」(S.33.)。塹壕は人間的なものを払い落とし、死者をも吸収し、兵士たちを「歯車装置」にするメカニズムとして叙述されている。自らを保ち続けるためにただ死だけを再生産する塹壕は、明らかに、〈血〉に対して異質なメカニズムである。後半部では、戦争の様々な舞台の一つとしてのこのメカニズムの内での表象も叙述される。

では塹壕は、その内部からいかなる場所として表象されるのか。ユンガーは、次のように書い

ている：「我々の周りに、巨大な灰色の冷徹がある。土壁、銃身の錆、標識、ケーブルは冷たく、生気なく、敵意をもって、流れ去る薄明から突き出ている。それらは、我々が一切の関係を失ってしまった対象である」(S.69f.)。この塹壕内で、ユンガーは自らが変化する様を認める：「際限なく私はすでに塹壕のうちにいる。あまりにも際限なく、感覚が次から次へと私のうちで消えていき、そして私は自然の一部となっており、夜という海の境界は定かではない」(S.76.)。塹壕内で、ユンガーは対象との関係を失い、さらには自らの感覚すらも次々に失っていく。主-客の関係は、基体としての主体が表象を通して対象を「関連へと強いて戻す」ことであった。塹壕内では人間と存在者との主-客の関係は、もう主-従の関係ではなく、それどころか「一切の関係を失って」いる。「塹壕」の章においては「待ち伏せて-あること」という、それでもみつめる者であった人間⁽³³⁾は、「突然、考える存在から感受する存在 (ein empfindende Wesen) に、たとえどれほど鋭い理性という武器をもってしても逆らえない諸現象のなぶり物になっている」(S.71.)。差異化できない現象の波にさらされ、人間は夢と現実の区別もできない「感受する」だけの存在者となる(S.91.)。ハイデガーは、世界が像となると、全存在者に基準を与える存在者でありうる位置を求めて人間は戦う(kämpfen)と指摘している⁽³⁴⁾。しかし塹壕内で人間は、「仕掛け (das Werk) が働き続けるための」、「最良の材料 (bestes Material)」(S.77.)になる。こうして、人間は戦いに敗れ、塹壕というメカニズムに飲み込まれ、「世界像」は崩壊する。この時に、根源的なものである〈血〉はどうなっているのか。塹壕に関する「中心」での叙述では、〈血〉が語られることはない。だが「材料」とは、〈血〉の通わぬ存在者を意味しないか？ このことは、兵士たちが「開かれた野戦」に向かう時、明白となる。兵士を死地へと赴かせるのは、祖国でも快樂でも規律でもない(S.89.)。兵士が、「それに対しては勇気も助けにならない」(S.88.)死の不安を抱えながらも前進するのは、「より高次の意志が彼の後ろにあることを証明している」(S.89.)のだ。そして〈血〉によって敵と味方はひとつになる。「我々が砲火と煙が立ちこめるなかで衝突し重なり合う時、我々はひとつになる。ひとつの力のふたつの部分である我々は溶け合っひとつの身体となる」(S.97.)。〈血〉が流れ込み唯一の身体を形成し、その姿を現すのは「開かれた野戦」においてであり、塹壕という歯車装置に〈血〉の居場所はない。

塹壕に関する叙述で明らかなのは、塹壕の表象不可能性ではなく、表象のあり方が変化したことである。「私」は塹壕を表象し語る主体だが、なんらかの「形而上学の真理領域」内にはいない。体系化された解釈は作動せず、表象する主体は基体ではない。「私」は、感受したものを表象することで、存在者の関連のなかに「なぶり物」として留まる。従属しながら表象する者、つ

(33) ボーラーは、ユンガーは戦争体験において「事物の純粋な直観」を現実化したと述べている。Bohrer, S.89. 特に S.87-101 参照。

(34) Heidegger: Die Zeit des Weltbildes. S.94.

まり感受し表象されたものを、最終的意味に辿り着くことなく語る者としての「私」がいる。変化は明らかである。主体はここでは存在者の「中心」ではない。

IV

『内的体験としての戦闘』には、二通りの変化が書かれている。ひとつは、〈血〉という根源的なものが主体としての個を否定したこと、もうひとつは、基体として表象する主体が従属的な「感受する」者に変えられたことである。前者は解釈の基底としてテキスト全体を貫き、後者はその解釈に収まらない。しかし、第一次世界大戦に特有の出来事であるのは、塹壕というメカニズムが産み出した後者であり、それは「主体性の形而上学」による戦争解釈を揺るがしている。

だからこそユンガーが、たとえ論理が破綻しようとも、保守革命的言説に、すなわち〈血〉による「新たな人種」の産出を告げる体系に固執したことは明確にしておかねばならない。つまりこのエッセイで、ユンガーは誤解の余地ない政治的立場を明らかにし、保守革命の論者として現実に介入することを選択した。しかしながらユンガーは、この戦争解釈が一面的なイデオロギーでしかない、遅くとも1923年には認識していた。同年新聞に連載されたユンガー初の小説『シュトゥルム Sturm』では、戦争に「野蛮なもの、野性的なもののみ」を見て取るのも、「愛国的—英雄的なもののみ」を見て取るのも「等しくイデオロギー的恣意」であると語り手が述べている⁽³⁵⁾。自らの認識を「イデオロギー的恣意」であると観察している点は、ユンガーの執筆を考える際に常に留意しておかねばならない。だがとにかく、『シュトゥルム』はその後1960年まで単行本化されることなく著者自身にも「忘れられ」⁽³⁶⁾、ユンガーはますます保守革命運動への関与を強めていくのが事実である⁽³⁷⁾。ユンガーが編集した論集『戦争と戦士 Krieg und Krieger』(1930)を批判するエッセイに「ドイツファシズムの諸理論 Theorien des deutschen Faschismus」⁽³⁸⁾と題名を付けたベンヤミンは、正確であった。

だが本論の問題設定にとって重要なのは、『内的体験としての戦闘』にユンガーの保守革命的言説を確認することや、叙述された二通りの変化のうちどちらが戦争の現実に忠実であるかではなく、このテキストが第一次世界大戦を近代の分岐点として呈示していることにある。この意味で、このテキストは主体の変容が記録されている「ドキュメント」である。ユンガーにかぎらず、その後の

(35) Jünger: Sturm. Stuttgart 1978. S.26.

(36) 『シュトゥルム』は、1960年書誌作成の際に「発見」された。Martus, S.68f.および Müller, S.24.参照。

(37) ユンガーの保守革命家としての活動については、Martus, S.48-62. および Thomas Nevin: Ernst Jünger and Germany: Into the Abyss, 1914-1945. Durham 1996. S.75-114.参照。ユンガーは、1926年にはヒトラーと献本しあっている。

(38) Walter Benjamin: Theorien des deutschen Faschismus. In: ders.: Gesammelte Schriften. Bd. III. Hrsg. von Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser. Frankfurt.a.M. 1991. S.238-250.

主体をめぐる言説は、「世界像」の崩壊する時代に直面している。そしてまた、このテキストを語る主体、書く主体、読む主体の問題も、主体という概念自体も、この崩壊から考えなければならない。